

昭和46年2月1日第3種郵便物認可  
平成17年3月1日発行（毎月4回）日発行  
俳句雑誌「おき」発行所

俳句雑誌「おき」

2月号

沖

沖  
発行所

# 路地の冬

林 翔

箸

焼 箸 を 売 る 声 路 地 に 細 長 し

ら く が き も 愛<sup>めく</sup> し 山 茶 花 路 に 散 り

こ こ に の み 大 地 の 怒 り 冬 紅 葉

疎 林 透 き か ぼ そ き か ぼ そ き 冬 の 空

私が中学生だった頃、一風変わった英語の先生が居た。英語の先生なら英米を高く評価するに違いないと思っていたら、「日本人は大昔から箸を使って物を食べていたんだが、西洋人は今でこそナイフやフォークを使っているが、少し前までは手づかみで物を食べていたんだ。その点、日本人の方がえらいよ。」と話されたのである。

中学生といっても、一年生か二年生の時である。その先生の言葉が脳に沁み付き、日本文化を誇らしく思ったことであった。

私の第三句集『石笛』に昭和54年の作として、

箸という文化が不思議建国日

があるのも、この先生の言葉が脳裡にあったからに外ならない。

『口事記』の須佐之男命の神話によれば、命があまり乱暴なので、姉に当たる天照大神の怒りに触れて、

雪曇朝酒しるしばかりかな

眠剤へ伸ばす手すこし冷たき手

電脳にわが脳敗れ十二月

脚二本否氷二本で歩むかな

「雪やこんこん」声若からば唱はむを

寒鴉意地で秀つ枝に居たいのか

高天原から放逐された時の事。

かれ避<sup>や</sup>追<sup>ら</sup>へて、出雲<sup>いづも</sup>国の肥<sup>ひ</sup>の河<sup>か</sup>上なる鳥髪<sup>とりかみ</sup>の地に降りましき。この時<sup>とき</sup>しも、箸<sup>し</sup>その河<sup>か</sup>より流れ下りき。ここに須佐之男<sup>すさのお</sup>ノ命<sup>のみこと</sup>、その河上<sup>かみ</sup>に人ありけりとおもほして求<sup>ま</sup>ぎ上<sup>あ</sup>り往<sup>い</sup>でまししかば、(下略)

から始<sup>は</sup>まつて、やがて八俣大蛇<sup>やまたのおろち</sup>退治<sup>たいじ</sup>のくだりになる。  
建国記念日を終戦前には紀元節と言<sup>い</sup>つていた事<sup>こと</sup>など、戦後生まれの人は知らないであろう。第一代天皇と伝えられる神武天皇の即位の年を、日本紀元の元年としたのであった。

林  
翔



# 柚子日和

能村 研三

## 日だまりの写真

暮の大掃除をしていたら、一枚の写真が出てきた。普段から整理の悪い方なので、探しているものが簡単には見つからず、時間と労力が必要だが、今回は神様が目の前に落ちてくれたような偶然に出あった。

その写真というのは、もうだいぶ前に亡くなった門岡木偶子さんが撮ってくれたもので、市川学園の日だまりで、先師登四郎と、林先生、福永先生の三人が休み時間に談笑しているもので、かれこれ三十年位前のものかもしれない。

私も卒業生なので、当時の校舎の配置はしっかりと記憶しており、撮影した場所がどこか特定でき、被写体の三人の先生もさることながら懐かしい一枚の写真であった。

この校舎は私の自宅から二、三分の所にあり、いつも始業ベルぎりぎりに走りこむ習慣がついてしまった。自宅より校門までは近く、校門へ入ってから校舎までの方が時間がかかったほどだ。

そんな懐かしい市川学園の校舎も数年前取り壊され、歩いて十分ほど奥に入った所に新しい校舎が建設さ

山裾へ起伏のまちや夕時雨

木枯や牢獄めきし地下酒舗へ

極月に極めるものの一つあり

柚子日和武雄忌はわが誕生日

秤にも乗つてみやうか柚子湯出て

一竿に大根干しある蔵廂

冬の日をあまねく溜めし捨火鉢

年来る地球のやまひ癒されよ

初風の行路直下に三番瀬

奔流のごときたつきやはや七日

れた。少子化に伴う男女共学を導く  
するための建設であったが、卒業生  
の一人としてはさびしいものがあ  
る。

本号にも三十五周年事業の一つ  
として案内が掲載されたが、三月  
二十六日に登四郎、翔、耕二の三先  
生の「学園句碑」が建立されること  
になった。建立される位置は、三先  
生が奉職されていた時代、職員室が  
あった付近で、さきほど偶然に見つ  
かった写真の撮影現場でもある。い  
ずれにせよ、三先生が長年通った市  
川学園に句碑が建立される縁は大変  
うれしい。句碑建立を喜んで賛成し  
てくれた、市川学園のご好意もあり  
がたい。この写真はいづれ、「沖」  
にも掲載されると思う。

能村研三



# 蒼茫集



冬 銀河

中尾杏子

唐辛子干す日遍くケルス山  
甘諸蔓のむらさき返す耶蘇の裔  
イエズス留<sup>る</sup>標<sup>ひょう</sup>綿虫に日の離れざり  
泡立草無頼派としてかく枯るる  
山茶花の散華踏みくる子の五十路  
天窓よ冬の銀河のこぼれ口

訛まじり

藤原照子

甲斐の嶺々晴れ一村の吊し柿  
「もみぢが…」のいまはの父の遠忌かな  
着地まで夢見ごこちや朴落葉  
溜息も呼吸のひとつ冬ざくら  
地震の地の訛まじりに雪便り  
落葉掃呼ばるはずなき背にこゑ

冬 麗

吉田陽代

暖炉には暖炉の吐息夜更けぬ  
聞かずとも体調はよし根深汁  
冬麗のわが椅子われを待ちてをり  
重心を低く雪道踏みいだす  
酢牡蠣食ぶ牡蠣も持ちゐる乳のいろ  
クリスマス逢瀬にも似て老ふたり

冬 麗の

斎藤棹歌

返り花色なき空の昏るとき  
子規横向き一葉顔を上げて冬  
冬空の残像遊びただ黙し  
煤逃げの隠しやうなき目出し帽  
水洩の齢互みに告げず居る  
冬麗の微塵とならむこころざし

# 潮鳴集

深山杉 田辺博充

枯蔓なほ一樹の縛をゆるめざる  
うそぶくや竹瓮沈めしあとの水  
深山杉千本直立不動神迎  
聖樹にもある臍の緒のやうなもの  
湖上なる逆さの山も眠りぬる

冬 至 中根喜与子

から足の身を泳がせて冬至かな  
橋脚に風の屯す都鳥  
日のさして八重の重さの冬牡丹  
一滴の日ざし余さず寒牡丹  
干葡萄せつなき甘さありにけり

北国日和 広瀬長雄

産土神へ睨づたひや七五三  
神留守の船守る太き舳ひ綱



沖見窓残し北窓塞ぎけり  
雪吊に北国日和つづきをり  
神還る木の神様は木の洞へ  
開拓村 宮内とし子

大根干す開拓村の空あをし  
懸大根月のひかりを放さざる  
パン生地を叩いて義士の日とおもふ  
家といふ籠をゆるめて年忘  
数へ日の大鍋小鍋使ひきる

矢印 藤村真理

矢印のすぐそこあり眠る山  
山眠る笹の葉ずれの楽のみに  
ぼくぼくと木橋をわたる毛糸帽  
日輪に重力のなし枯木山  
日の音とおもふから枯葉かな

# 沖作品



# 能村研三選

かりがねは風の結び目かと思ふ

東京

中尾 公彦

火の番やしりウスに行く翼欲し

鴨百羽飛地のやうに散りぬたる

星明り干大根の反るかたち

はつふゆの光積み上げ角砂糖

千葉

林 昭太郎

干布団大東島は風力2

屋根に石石の向かうに冬の瀟

陽の触るる音のしてゐる白障子

文化の日われの秘密の数字持つ

東京

坂 ようこ

地下街に四辻ありておでん酒

忙中の閑日だまりに冬蝶と

一つ灯に客も主も楯の宿

裏山の冬木叩けば父の声

工藤 進

掛大根翳を濡らしてゐるやうな

色変へぬ松を見据えて鬼瓦

白鳥来鍵盤に指すべるやう

これよりは雪の日数や風花す

捨つるものある幸せや年の暮

冬鴉啼いて夕暮れ加速する

月光に呪文かけらる黄水仙

寒月や群れることなき友が居り

冬ざれの街見下して吾はガリバー

被災地に母在すみぞれもう来るか

眠らんとする泥揺すり蓮根掘る

夜は風が泥凹ませり冬蓮田

一切れの肉とワインの聖誕祭

生き物の活きて潜める枯野かな

冷まじや皆上がり眼の兵馬俑

竹林の暗きに透きて櫛もみぢ

神奈川

菅原 健一

茨城

内山 花葉

千葉

鈴掛 穂

さきがけの勢ひありあり鴨の陣  
 老の膝やはし酔余の里神楽  
 梟やむかしの闇は手で押して  
 植木屋の箒目確と冬隣  
 小六月我より長き影連れて  
 新年号並べ閉店予告かな  
 遺言のあらまし決めて枇杷の花  
 グラタンに焦げ目効かせて獵期来る  
 黙想の梟森を知りつくす  
 湖の紺溶かむと一途白鳥来  
 羽田の灯ふやし湾岸年詰まる  
 橋脚が島の半分青蜜柑  
 伊吹嶺の風呼ぶ大根干しにけり  
 冬初め刃のごとく立つるばの耳  
 石庭の砂紋磁気帯ぶ冬の朝  
 海霧湧くや京葉線の弧のうちに  
 雪吊りの縄は藺草のうすみどり  
 ポケットに下町マップ冬うらら  
 戸隠の森の天蓋星月夜  
 まつすぐに降る冬の雨稿起す  
 夕映えに身を柔かく浮寝鳥  
 数へ日の夜はゆつくりと茶碗  
 鮭酒の海の香沁むる一口目  
 倒れ込むラガーに長きホイッスル  
 ひとところ日の濃きポインセチアかな

東京

高木 嘉久

千葉

安藤しおん

東京

七種 年男

千葉

佐々木よし子

市川市

近藤 栄治

上田 玲子

日溜りの水なきプール十二月  
 冬はじめつるんと半熟卵かな  
 指で梳く髪にうつりし焚火の香  
 迷ひぬし泥つき葱の置きどころ  
 捨てかねし文たきしろに焚火かな  
 煙草の香しむ父の部屋胡桃割る  
 国引きといふ力あり鎌鼬  
 鱗まで透きとほるほど煮凝りぬ  
 冬木立垂直に櫂干されける  
 観覧車聖夜の光吸ひあぐる

神奈川県

矢崎 昌

栗原 公子

### 新人賞予選句（二月）

かりがねは風の結び目かと思ふ  
 尾根に石石の向かうに冬の濤  
 文化の日われの秘密の数字持つ  
 掛大根鬚を濡らしてゐるやうな  
 捨つるものある幸せや年の暮  
 生き物の活きて潜める枯野かな  
 梟やむかしの闇は手で押して  
 新年号並べ閉店予告かな  
 グラタンに焦げ目効かせて獵期来る  
 橋脚が島の半分青蜜柑

中尾 公彦  
 林 昭太郎  
 坂 ようこ  
 工藤 進  
 菅原 健一  
 内山 花葉  
 鈴掛 穂  
 高木 嘉久  
 安藤しおん  
 七種 年男

# 沖作品 選後句評

\*  
能村研三

かりがねは風の結び目かと思ふ 中尾 公彦

絵画的な美しい句である。かりがねは雁のことであるが、雁とか雁の列などという言葉を使わず、かりがねという言葉を上五に据えたのもよい。かりがねは雁の総称で特に子雁をこの名で呼んでいるという。この句の眼目は、やはり中七の「風の結び目」という比喩で、詩的で美しい言葉である。比喩は、直喩と暗喩があるが、この句は、「かと思ふ」という直喩の形態をとっている。直喩は一般的には、「……のやう」「……の如く」「たとへば」「……めき」「……ほど」という言葉で示すが、「かと思ふ」と言う言い回しは、ここで例えたもの「風の結び目」という言葉が必要以上に際立たせることなく自分自身が感じとったままの自然なかたちで眩いているかのようである。もう一句「ダム抱き山々の寝ね支度かな」の句、太古からある山河の大自然が、近代になって人間が作り上げたダムという巨大な構造物をもしっかりと包み込んで眠らんとしている。

屋根に石石の向かうに冬の溝 林 昭太郎

遠近法を旨く活かした句である。一読して寒風に吹きすさぶ荒涼とした北国の海を思い浮かべる。読者の視点をまずは、海に面した蟹小屋か何かの屋根の石に引き付けた。海から吹く強風で飛ばされないように防護しているものであるが、冬海で暮らす人々の凄まじさが伝わってくる。そしてさらに読者の視点をその蟹小屋の向こうに広がる荒涼として暗い冬の溝へと誘いこむ。岩礁に打ち寄せる波音も凄まじく冬の溝の厳しさがひしひしと伝わってくる。「石」という言葉を二度畳み掛けるように使ったことで、一句の中に間を生じさせ、その一拍の空間が句を大きく広げた。もう一句「千布団大東島は風力2」の句、NHKの気象予報でもよく耳にする言葉だ。大東島は、日本列島から遥か離れた南の島であるが、台風などの進路を伺う気象上の重要ポイント。台風も収まり安定した天気になった安堵感が伝わってくる。

文化の日われの秘密の数字持つ 坂 ようこ

現代人の私たちは、知らないうちに無数の数字で管理されている。銀行の口座番号しかり、最近論議をよんでいる「住基カード」などもそうだ。キャッシュカードやパソコンを使うにも、機械を操作するには、暗証番号かパスワードが必要である。そんな数字で管理される時代がきてしまったことに、やや戸惑っている作者なのかも知れないが、ため息をつきつつも大きな時代の流れには逆らうわけにも行かない。もう一句「裏山の冬木叩けば父の声」の句、何か飯田龍太の句「父母の亡き裏山開いて枯木山」の句を思い出した。